

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ここまでのあらすじ

《中学二年生のほく（雄太）は、夏休みにおじさんの別荘（小屋）におじさんと行くことになる。そこで、おじさんが勤めている大学の研究室に所属している大学生たち（長老さん・リーダーさん・ユイさん・ホクさん）が木道を作る作業の手伝いをしている。》

何本の※枕木を運んだだろうか。だんだんと腕に力が入らなくなってきた。

ちよつと疲れたなと思いつながら枕木を長老さんといっしょに持ちあげた。そのときだった。突然ゾワとした。ほくにはなじみのある感覚。思わず枕木から手を離し、棒立ちになった。

「なんだよ、急に、重たいじゃないか」

長老さんに文句を言われた。でもその言葉が耳を素通りする。

①

ん？ という顔でリーダーさんがぼくを見た。

「なんだ、トイレか？」

顔が冷たくなってくる。

「そんなじゃない。来る」

え？ というみんなの顔が増えていく。

「何が？」

「カミナリ！」

たたきつけるように言ってしまう、あわてた。とりつくろうこともできないほど、うろたえた。この場所からすぐにも逃げだしたくなった。

(しまった！)

② ぼくはすぐにそう思った。同時に、小学生のころのことを思いだしていた。小学三年生で転校してすぐのことだった。

カミナリが鳴りはじめた。ぼくはこわくて泣いた。手がつけられないほど泣いた。みんながぼくを遠巻きにして見ている。先生が来て保健室に連れていかれた。その間も幼子^{おきなこ}が泣きじゃくるように、ぼくは泣いた。泣きに泣いていたら、母さんが保健室にやってきた。

小さいころから、大きい音にはとても敏感^{びんかん}でこわがるたちだったぼく。少しずつ人工的な音にはなれていったけれど、カミナリだけはどうしてもだめだった。

そのとき以来、クラスのみんなにからかわれるようになってしまった。

あるとき、一枚の絵をクラスのみんなに見せている子がいた。

「この絵ね、風神雷神^{ふうしんらいじん}図^ずっていうんだって。雷^{かみなり}の神様と、風の神様の絵」

みんながわらわらと絵のそばに近づいた。

「な、この雷神、雄太くんに似てない？」

みんなの^A背後^{せいご}からその絵を見た。

(全然似てない。だいたい、ぼくの目は細い)

心の中で反論した。

「そう思う？ あたしもそう思ったんだ。だって、雄太くん、カミナリが鳴っているとき、見開くように大きな目になっ

て、涙^{なみだ} ③ こぼして、大きな口あけて泣いてたじゃない」

(え、ぼくってこんなぎよる目になっているのか？)

こわがって泣いているときの顔なんて、自分では見たことがなかった。

ぼくは傷ついた。

そして気がついた。

(みんなって、ぼくほどカミナリがこわくないんだ。ぼくって変なんだ)

まわりのみんなを上目づかいで見る。

「すごい泣き声だったよな」

「でもさ、カミナリがこわいなんて、ちょっとかわいくない？」

どっと笑い声があがった。

(かわいい？ かわいそうだと同情されるならまだわかるけど、かわいい？)

ぼくのプライドは ④ と音をたててくずれていった。

そのとき以来、カミナリをこわがるぼくをみんなから隠^{かく}そうと心にかたく誓った。

幸い、一年でその学校から転校した。

しかし、日本全国、どこに行ってもカミナリは鳴る。それも急に鳴りだす。ぼくはいつも気をはって、カミナリがこわい自分を隠し続けた。そのために、みんなから一歩離れることにした。さらにうしろに一歩。そのうち自分から積極的に何かをする気がなくなっていく。転校をくり返したせいばかりじゃない。ぼくは一人になっていった。

カミナリをこわがるだめなぼく。なんとかしようと思がいているうちに、カミナリが鳴る前の気配を感じとるようになっていた。⑤ 急に鳥肌^{とりはだ}がたったり、吐^はき気がしてくる。体全体でカミナリの鳴る前兆を感じるようになっていった。

今、カミナリの鳴る前のかすかな気配がする。微妙に**びみょう**に空気がふるえはじめるのがわかる。毛穴が少しずつ開いていく不快感、なじみのある感覚だ。

（カミナリがこわいこと、必死に隠してきたのに……）

ぼくは、がっかりしてしまった。みんなにぼくの最大の弱みを見せてしまった。からかわれるに違いない。ここでの楽しい暮らしもこれで終わりだ。

（油断していた）

ぼくは⑥くちびるをかんだ。

顔をあげ、おそろおそろみんなの表情をうかがった。ところが、ぼくの思いとうらはらに、不安そうなみんなの顔が目の前に並んでいた。

「えっ？」

からかわれると身構えていた⑦ぼくは拍子ぬけした。

「カミナリ？ いい天気だぞ」

ユイさんの声が不安げだ。

「そういえば、このところ来てないな」

長老さんがつぶやいている。

「おい、ホク、どうだ？」

リーダーさんがホクさんを見る。

「カミナリはいつ来てもおかしいけどな」

太陽の光を手でさえぎりながら青い空を見ていたホクさんが、「あれか？」と指さしながらつぶやいた。全員がいつせ

いにそっちの方向を見る。むこうの山の稜線りようせんのきわに小さい一かたまりの黒い雲がわいていた。

「カミナリ雲やろか？」

あんな小さな雲が、と思う間もなく、すぐにリーダーさんの大声が耳元でした。

「撤収てしゅう！」

声がかミナリの音のように聞こえる。浮き足だった気持ちにムチが入り、足がすでに走ろうよとせかしている。

みなで必要な荷物をまとめる。工具をビニールシートで包み、重石おもしをのせる。

そして、いっせいに小屋にむかって小走りにかけた。ぼくはあせった。もしぼくの予感がまちがっていたらどうしようという不安が頭をかすめる。でも、体はカミナリの予感で小さきぎみにふるえはじめている。カミナリは確実に来る。

「ゆっくりと、急ごうや」

リーダーさんが声をかけてくれた。

ぼくは小走りでみんなのあとについていった。でも、信じられないほど呼吸が荒くなってしまう。ゆるやかなアップダウンの草原なのに、すぐに息が上がってしまう。

「雄太、高地トレーニングって知ってるか？」

リーダーさんがうしろから話しかけてきた。返事をするどころじゃない。首をふるのが精いっぱいだった。

「オリンピック出場のアスリートなんかが、高地でトレーニングして結果をだしてるんだよ。標高の高いところだと気圧が低くなるから体に**B**負荷ふかしがかかって、平地より鍛えきたられるらしい。ここは、標高が高いだろ」

荒い息をしながらリーダーさんの方にふりかえった。

リーダーさんは平然としてぼくのうしろに立っていた。

「雄太はまだここの高さになれていないから、呼吸が苦しくなると思う。だから、ゆっくりと、マイペースでな」

カミナリの予感に追いたてられるように走り、荒い呼吸をしている。この呼吸の荒さはカミナリがこわいばかりじゃなく、標高が高いせいもあるらしい。

小走りに走っては、すぐに足をとめ、ひざに両手を置いてあえぐような呼吸をくり返す。あせればあせるほど、早く走れない。

「おい、雄太。ザック、よこせ」

でも、と⑧ちゅうちよしていると、長老さんがぼくのザックをむりやり取りあげた。そして、自分のザックの上にくくりつけた。急に体が軽くなった。ふわふわと体が浮くように感じながら走る。でも、みんなについていけない。

「先に行つていいですよ」

申しわけなくなつて、リーダーさんに言った。でも、その言葉は軽く流された。

「さっきも言つたら、マイペースで行けや」

急いだ。でもぼくなりにはか進めない。

前を長老さんがはや足で進んでいく。ぼくのザックが長老さんのザックの上でゆれている。そしてぼくのうしろにはリーダーさんがいる。カミナリの予感と戦っているぼくにとって、二人にはさまれていることがとても心強かった。

ぼくのうしろを歩くリーダーさんは決して急がせようとはしない。長老さんから遅れてしまつても、だまつてうしろにいてくれる。ぼくは、うしろをふりかえつた。リーダーさんのクセなのか、ザックからたれているヒモをもてあそびながら、雲の方向、そしてぼくのことを見ていた。

みんな無言で歩いている。

カミナリは確実に来る。その予感に体がふるえる。体をつらぬく寒気と、髪の毛が逆立つような感覚に追いたてられるようにして走る。そしてあえぐ。

まわりが白くかすんできた。

「ガスつてきたな。まずいな」

ガス、すなわち霧がでてきたのだとリーダーさんに説明された。本当にあつという間にガスは濃くなり、進むべき道が見えなくなつてしまった。来るときには、あんなにはっきりしていた道が全く見えない。どうしたというのだ。だれかがスモークをたいているのかと、ありえないことを思つたりする。

濃いガスが立ちこめて、登山道のある場所、行く方向がわからない。まわりの山々も、※池塘も雪溪もみんなガスが消してしまった。⑨東西南北、目印になるものが何も見えない。足元を泳がせ、道をさぐるようにして進んでいく。

細い道の分岐点にきた。足元にニッコウキスゲの黄色い花がガスの中からぼうつと浮かんでいる。

(どっちの道を行けばいいんだ?)

足がとまった。先が見えないと、こんなに不安な気持ちになるのか。カミナリの予感も加わつて、泣きだしそうになった。リーダーさんがポケットから何かを取りだして、こつちだと道を示してくれた。磁石だと考えつく前にすでに体が動いていた。足がもつれる。

(とにかく小屋に逃げこみたい)

ガスがどんどん濃くなつてくる。道を歩いている長老さんの姿がガスの中にとけこんでいく。気温がぐんぐん下がってくるのがわかる。

小屋から作業地点まではゆつくりと歩いて一時間くらいなのだが、二時間近く歩いている気がする。信じられないほど長く感じられる。

前方から、じやりを踏みしめる足音が聞こえてきた。今まで、小屋のまわりにしかじやりが敷きつめられている場所はなかった。先頭を歩いていたホクさんが、小屋のそばに到着したに違いない。その音を聞いて、ぼくはほっと一息ついた。ガスで見えないけれど、小屋はすぐそばだ。そのとき、風がずっと走った。ぼんやりと小屋の一部と戸口に立っているお

じさんの背中が見えた。雨ガッパを着ている。

「おじさん！」

声をあげると、おじさんはふりかえって両手を広げた。

「お、^⑩間に合ったか」

ぼくは、小屋へのじゃり道をころがりおり、小屋の中へ逃げこんだ。

ほとんどそれと同時にだった。空が一瞬光った。

(にしぎょうこ『ぼくたちのP(パラダイス)』より)

※ 枕木・・・鉄道のレールの下に横に敷き並べる部材。ここでは、山道の整備のために使っている。

※ 池塘・・・高山や寒冷地の湿地^{しづち}の池。

問一 線部A「背後」・B「負荷」の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

問二 この文章を大きく三つに分けるとすると、どこで区切ればよいですか。二つ目の段落、三つ目の段落の最初の五字をそれぞれ抜き出さない。(句読点や記号も字数に数えます。)

問三

①

に当てはまることばとして最適なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア ぼく、帰る

イ カミナリが来る

ウ トイレに行きたいよ

エ 腕が痛いよ

問四

線部②「ぼくはすぐにそう思った」とありますが、この時「ぼく」はどんなことを考えていますか。その説明として最も近いものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 大学生たちに対して、乱暴な口のきき方をしてしまったことを後悔している。

イ 大学生たちに対して、これからカミナリが鳴ることをうまく伝えられなくて残念に思っている。

ウ 小学三年生のカミナリで泣いた出来事を思い出し、なつかしさを感じている。

エ カミナリがこわいことがみんなにばれてしまうような失敗をしてしまったと思っている。

問五 ③・④ に当てはまることばとして最適なものを、次のア～キの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号は一度しか使えません。

ア ほろほろ イ めそめそ ウ しくしく エ がらがら
オ ぶくぶく カ とほとほ キ ばんばん

問六 ——線部⑤「急に鳥肌がたったり」とありますが、「急に鳥肌がたった」と同じような意味を表す表現をこの部分より前から十字以内で抜き出さない。(句読点や記号も字数に数えます。)

問七 ——線部⑥「くちびるをかんだ」、⑧「ちゅうちょ」のこの場面での意味として、最適なものを次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

⑥ ア くやしさをこらえた。
イ 覚悟を決めた。
ウ 不満の気持ちを表情に表した。
エ 悲しみにたえられなかった。

⑧ ア ありがたく思うこと。
イ ことわること。
ウ ためらうこと。
エ 心を決めること。

問八 ——線部⑦「ぼくは拍子ぬけした」について、この時の「ぼく」の気持ちを八十字以内で説明しなさい。(句読点や記号も字数に数えます。)

問九 ——線部⑨「東西南北」の「東」「西」「南」「北」の文字を一字または二字使った四字熟語を一つ答えなさい。

問十——線部⑩「間に合ったか」とありますが、「間に合った」とはどういうことですか。三十字程度で説明しなさい。
(句読点や記号も字数に数えます。)

問十一 本文の内容にあっているものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア「リーダーさん」と「長老さん」は「雄太」がカミナリが苦手なことを知っていた。
イ「リーダーさん」と「長老さん」は「雄太」が不安にならないように、常に少し前を歩いていた。
ウ 小学三年生のできごとで、カミナリが「雄太」のトラウマになっている。
エ「雄太」は風神雷神図の風神に似ているとからかわれたことでカミナリが苦手になった。
オ「雄太」は自分のじやりを踏みしめる足音で小屋の近くまで来たことがわかり、ホッとした。

二

次の文章は、筆者たちがヒマラヤで、氷河の調査をしたときのものです。読んで問いに答えなさい。

氷河の※ボーリングは、順調に進んでいた。一週間以内に五〇メートルの深さまで掘れるだろう、と隊長の渡辺さんは自信たっぷりだった。

だが、ボーリングでは、①思いがけないことが起きていたのである。

僕たちがはるばるこんな高いところまで氷河を掘りにきたのは、②そこが氷河の涵養域だからであった。涵養域では、とにかく、とける量より積もる量のほうが多いので、雪がどんどんたまっていく。それが氷に変わっていくのだから、氷河を掘っていけば、だんだん昔の水ができて、それをA分析すれば昔の気候がわかるのだ。

ここでだいじなことは、雪のとけかたである。ヒマラヤの五〇〇〇メートルを超えるような高所では、気温が低いので、雪は太陽に照らされると、そのまま昇華してしまう、と考えられてきた。

③、低地のように雪の表面が零度になって氷になってとけるのではなく、昼間でも気温はマイナスになったままの高所では、氷にならずに、固体の雪からいきなり水蒸気になって昇華してしまうだろう、と思われていたのだった。ところが、ヤラ氷河はちがっていた。氷河の表面には、まだ氷にならない雪が厚くたまっている。その下に向かって掘削していくと、なんと、水が吹き出してきたのだ。あつてはならない水が、大量に出てきたのである！

その知らせは、当時、※キャンチェンの山小屋にいた僕のところにも届いていた。なんということだろう。氷河調査隊の目的は、氷の結晶にとじこめられている昔の空気(酸素)を分析して、昔の気候を復元することだったのだ。だが、もし水が出たとなると、すべてはダメになってしまう。水は氷の隙間(すま)をしみ込んでいくから、昔の水にいまの水が混じってしまうのだ。もちろん、しみ込んだ水はそこでまた凍る。そうしたら、深いところにある氷でも、とけてしみ込んできた水からできた氷を含んでしまって、昔の正確な状態はわからなくなってしまふ！ 日本から苦勞してたくさんの器材を運

び、こうして五四〇〇メートルのキャンプで息を切らしながら掘削したことは、すべてムダになってしまったのだ！

だが、④ 渡辺隊長はじめ、隊員たちの顔は明るかった。

「こんな面白いことはない」

と言うのである。

「えっ、でも、これでこの調査は失敗じゃないの？」

「最初の目的からすれば、そうかもしれない。でも、ヒマラヤのこんな高いところで、氷河から水が出てくるなんて、誰が想像した？ それだけだって、すごい発見じゃないか」

なるほど、そう言われればそうだった。誰も知らなかったことが、想像もしなかったことが、この氷河ボーリングでわかったのだ。科学の発見とは、そういうものかもしれない。いろいろ考え、計算して、予想どおりの結果がでることもあるけれど、ほんとうは、そんなことのほうがまれなのだ。自然は、いつも人間の予想を超えたことをする。そこに思いがけない発見があり、それでまた科学が進むのではないか。

「それに、とうとう見つけましたよ」

隊員の幸島司郎さんが嬉しそうに言った。

「えっ、いたの？」

「いたんです。氷河の※消耗域に」

「※ユスリカでした」

これもすごい発見だった。ヒマラヤの五〇〇〇メートルを越える氷河の上で生活している昆虫が見つかったのである。もちろん、世界最初の大発見だった。日本アルプスの冷たい雪溪のなかで、※カワゲラや※ガガンボを見つけた幸島さんは、ヒマラヤの氷河にも必ずそんな

⑤

がいるにちがいない、と考えて、それを探したくてこの調査隊に参加したのだっ

た。僕たちがただ漫然と見ていただけでは、決してみつからなかったにちがいない。必ずいる、と思っていっしょうけんめい探したからこそ、見つかったのだ。

しかし、氷河の上のユスリカは、いったい何を食べて生きていけるのだろうか？

それを疑問に思った幸島さんは、氷河の上で見つけた幼虫を解剖して、顕微鏡で覗いてみた。そうすると、なんとそこには、藍藻（池や川底をおおっている小さな糸状の藻のようなもの）やバクテリアが見つかったのである。五〇〇メートルの氷河の上に、光合成をする藍藻のような植物が生育し、それを食べるユスリカとのあいだに一つの生態系が成立していたのだ！

これは、さらにすばらしい発見だった。幸島さんの報告は、のちに『ネイチャー』という世界的な科学雑誌に載り、世界の生物学者を驚かせたのである。

氷河から出てきた水も、実に多くのことを教えてくれた。氷河調査隊が明らかにしようとならっていたもう一つの課題、ヒマラヤの氷河はどうやってできるのか、という問いを解くカギが与えられたのである。ボーリングしてみると、雪はこれまで考えられていたように、だんだんと重みでつぶされ、少しずつ空気が抜けていつて氷になっていくのではなかった。それは、いちどとけた水が雪の層のなかをしみこんでいき、下にある冷たい氷河の氷にふれたところで、いきなり凍るからであった。つまり、雪がだんだん氷になるのではなく、雪はいちどとけて水になり、それがいきなり凍って氷河の氷をつくっていたのである。氷河の上に積みあがっていくので、こういう氷は上積氷と呼ばれる。こういう過程で氷河ができるのは、寒い北極地域の氷河だけだと考えられてきた。それがヒマラヤでも、これと似たしくみで氷河ができていることがわかったのである。

（小野有五『ヒマラヤで考えたこと』より）

- ※ ボーリング・・・ここでは、氷河を掘ること。
- ※ キャンチェン・・・ヒマラヤの氷河調査隊の基地のある場所。
- ※ 消耗域・・・氷河の中で、雪が降り積もっても凍らずに溶けて流れ出している領域。
- ※ ユスリカ・・・蚊に似ている昆虫。
- ※ カワゲラ・・・溪流に住む水生昆虫。
- ※ ガガンボ・・・蚊に似ているがそれより大きく、脚が長い昆虫。

問一 線部A「分析」・B「生育」の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

問二 氷河調査隊の目的は、何ですか。本文中から四十字以内で抜き出しなさい。(句読点や記号も字数に数えます。)

問三 線部①「思いがけないこと」とは、どのようなことですか。「こと」に続くように本文中から十字で抜き出しなさい。(ただし句読点や記号は文字数に含みません。)

問四 線部②「そこ」とありますが、「そこ」の説明として最適なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 雪がどんどんたまっていく領域。
- イ 雪が氷になって解けていく領域。
- ウ 五〇メートルの深さまで掘れる領域。
- エ 雪が水になって吹き出す領域。

問五 ③に当てはまる言葉として最適なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア しかし
- イ なぜなら
- ウ さらに
- エ つまり

問六 線部④「渡辺隊長はじめ、隊員たちの顔は明るかった」とありますが、隊長や隊員たちの表情が明るかったのは、なぜですか。その説明をした次の文のA・Bに本文中からそれぞれ五字の言葉を抜き出して入れ、文を完成させなさい。

最初の目的からすれば、A だったが、B があったことに喜んでいるから。

問七 ⑤に当てはまる言葉として最適なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 光合成をする生物
- イ 北極域で生きる藻類
- ウ 寒さや低温に強い虫
- エ 氷河に根をはる植物

問八 本文の内容に合うものを次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア ヤラ氷河は五〇〇〇メートルの高所にあるため、固体の雪はいきなり水蒸気になって昇華してしまう。
- イ ヤラ氷河では、昔の水にいまの水が混じってしまったため、昔の空気の正確な分析ができない。
- ウ ヤラ氷河の氷の底では、藍藻のような植物とユスリカとのあいだに一つの生態系が成立していた。
- エ ボーリングの結果、雪は、だんだんとその重みでつぶされ、空気が抜けていつて氷になることがわかった。
- オ ヒマラヤの氷河は、北極地域の氷河と似ていて、雪がいちどとけて水になり、それがいきなり凍ってできる。
- カ 幸島さんの報告は、氷河の涵養域にユスリカが生息していることを証明したもので、世界の生物学者を驚かせた。

問九 〰線部「自然は、いつも人間の予想を超えたことをする」とありますが、あなたの知っていることの中からその具体例をあげ、八十字以内で説明しなさい。(句読点や記号も字数に数えます。)

三

次の各問いに答えなさい。

問一 「延」の黒字の部分の書き順は何画目ですか、漢数字で答えなさい。

延

問二 「我田引水」の正しい意味をア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア その場に応じて適切な手段をとること。
- イ 必要なものを自分で生産すること。
- ウ 自分に都合のいいようにすること。
- エ あつかましくずうずうしいこと。

問三 ①、②の対義語（反対の意味の言葉）を の中の語を組み合わせてそれぞれ漢字で答えなさい。

- ① 温暖
② 容易

せい	ぜん	なん	とく	へい
こん	れい	てん	あん	かん

問四 線部を例にならって敬語に直しなさい。

例	知事が地域清掃活動の視察に来る。	来る	↓	（いらっしゃる）
ア	差し上げた着物をぜひ着てください。	着て	↓	（ ）
イ	先生から貴重な意見をもらった。	もらった	↓	（ ）

四

次の線部を正しく漢字に直しなさい。送りがなが必要なものには、送りがなをつけること。

- ① 船をソウジュウする。
② 賞状をサズケル。
③ 勇気をフルウ。
④ 会議でトウロンする。
⑤ コウテツの車体。
⑥ シンコクな事態。
⑦ 結論にイタル。
⑧ 友人とダンショウする。
⑨ 川のミナモト。
⑩ ビジュツの作品。

受験番号
氏 名
得 点

一

問一 A

B

問二 二つ目の段落

三つ目の段落

問三

問四

問五 ③

④

問六

問七 ⑥

⑧

問八

問九

問十

問十一

二

問一 A

B

問二

問三

こと

問四

問五

問六 A

B

問七

問八

問九

三

問一

画目

問二

問三 ①

②

問四 ア 着て↓ ()

イ もらった ↓ ()

四

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩